

なにわの元プロ野球選手③

元阪神タイガース 星野おさむさん (41)

開幕戦を白星で飾った——と言っても、我々が日頃観ているプロ野球ではなく、独立リーグ「四国アイランドリーグプラス」のこと。愛媛マンダリンパイレーツは4月1日のオープンニング・ゲーム(徳島県阿南市)で、昨年リーグ王者の徳島インディゴソックスに4対2で快勝。チームを率いて2年目の星野監督は、内野手として阪神・近鉄・楽天で17年間プレーし、引退後も楽天で5年間コーチを務めた。プロ野球へ輩出すべく人材育成を目標とする独立リーグは、若い指導者にとっても球界復帰を目指す場である。

(フリーライター・吉岡雅史)

「俺たちの時代」めざし 指導者修行の日々

「今年は、ロースコアで守り勝つ野球になります。なにしろ、去年のレギュラーがほとんど抜けちゃいましたから」
星野監督は表情を緩めずに話す。勝つことと育てることを両立させるテーマで采配

技術を教えてもらえなかった」と言っただけで選んでもいたそう。九九を習っているレベルなのに、方程式を教えてくれと言われてもねえ」と、ため息まじりに話した。実際に独立リーグの試合を観戦してみると、荒削りな印象は否めない。ただ、ドラフト指名という明確な目標を持った選手たちには、夢を追う若者ならではの「みずみずしさ」がみえつつある。

だからこそ星野監督は「今の自分とプロとの力の差を、ちゃんと理解してほしい」からと妥協はしない。さらに指揮だけでなく、編成にも積極的に乗り出し、今季は前中日の河原純一投手(39)と前横浜の橋本将捕手(36)を獲得した。一軍経験の豊富な両選手とも球界復帰を目指しており、星野監督は「監督コーチとはどうしても、先生と生徒のような関係になってしまいうけど、2人は絶対のお手本になる」と、期待している。

プロの一番の思い出は 甲子園でプレーできたこと

埼玉県の公立校、福岡高校からドラフト外で阪神のユニフォームに袖を通したのは89年だった。182センチと上背はあったが、入団当時は体力測定の数値がチーム最下位。しかし、二軍で地道に流し

試合を行い、結果は2位と3位。2005年のリーグ発足から、愛媛だけ年間優勝がない状態が続く。選手の年俸が100万円程度でも、給料を得てプレーしている以上、れっきとしたプロだ。同時に、ドラフト指名される選手を育てるというリーグの理念がある。勝つことと育てること。両立させづらいテーマを抱えて、采配を振るっている。

「試合以前にプロのレベルの練習をこなすだけの体力がみんなないから、その辺は徹底してやりました。辞めていった者の中には『1年間



若手選手にバントの手ほどきをする星野監督



星野おさむ氏(球団HPから)

た汗は裏切らなかった。

5年目に待望のプロデビューを果たすと、7年目からは一軍に定着し、チームにとって欠かせない存在となっていく。

「阪神という球団に最初に入れたこと。甲子園でプレーできたことが、プロでの一番の思い出です。バントのため代打で出て、そのまま守備固め。何事も起こらないのが大成功で、もし何かあったら一大事、という経験ができたのは、とても役立っています」

97年には自己最多となる117試合に出場し、翌98年は8番ショートで初の開幕スタメンに名を連ねた。ところが2つエラーをしてしまい、翌日は2年目の今岡(現口

ツテ)に番を奪われた。

「いきなり今岡がホームランを打つて、そのまま(レギュラー定着)ですよ。まあ、僕が彼を育てたみたいなものですね」と星野監督は自嘲気味に笑った。

阪神で12年プレーしたあと近鉄に移籍し、2003年には111試合で12本塁打、51打点と自己最高の成績を収めた。近鉄にとって最後のシーズンとなった04年には、本拠地最後の試合でサヨナラヒットを打ち、シーズン最終戦では最後のバッターにもなったことで、ファンの記憶に名を残した。

近鉄がオリックスと合併したことに伴う分配ドラフトで楽天に移り、1年プレーして現役を引退。そ



恩情でチームに残るより 独立リーグでも監督の方が

楽天との契約が切れ、選択肢はいくつかあった。楽天にはジュニアコーチというポストがあった。小中学生対象の野球スクールで指導するというものだが、そのまま残留することも可能だった。しかし、「恩情でチームに残るより、監督をやらせてもらえるといいことだったんで」と、取って代わった。ドラフト外から這い上がってきた男の意地だったのだろう。

だからこそ、独立リーグの若者たちの気持ちがかかってやれる。選手がプロを夢見るように、独立リーグは若き指導者にとっても、来るべき日への準備期間でもあるのだ。

「野村監督の元で4年コーチをできたし、それまでも岡田監督とか、頭のいい監督の元でプレーできたのは勉強になったし、幸運だったと思います。近い将来必ず、僕らの世代の時代が来るはず。1つ上には立浪さん、同学年には慎也(ヤクルト・宮本)。その時に備え、スキルを磨いて、しっかり準備をしておきたい」

若手のころ、一軍を目指したときと同じような目つきになった。